



World of Uroburos

For Adult Only

セイバー、君は覚えているだろうか。

ここが月の裏側だということを。

霊子の海の底だということを。

World of Uroboros

作：assault

挿絵：吉飛雄馬・桐沢しんじ

「んっ、んううっ。ここは……どこだ？ 余は一体何をしていた？」
きらびやかな真紅の衣装に身を包んだ——それにしては随分と派手な——騎士は、重いまぶたを開きながら辺りを見回した。

冷たい地面に長く倒れていたせい、右半身だけが異様に冷たい。腰にはコルセットが締められ、豊かなバストがより魅力的に見える。長く裾の広がったスカートの裾は広がりを見せることもなく地面に落ち、前の部分は見せつけるかのように透明な生地で見えている。一見すると挑発的な格好も、彼女から溢れ出る気品が、自信の表れであるかのようにも見えた。

「ご機嫌よう、セイバー。気分はどうかね？」

ふと、足元から声がかかる。目を向けると、そこには見覚えのある黒いフードとマントに身を包んだ男が立っていた。

「キャスター！ くっ、余はお前の策略に見事はまわってしまったということか」

起き上がろうとして、後ろで手が縛られていることによりやく気づく。彼女はそこから無理矢理暴れることはせず、落ち着いて見下ろすキャスターを睨み返した。

「ご名答。そして、君はもう私から逃れることは出来ない」

「ふん、随分と自信があるようだな。だが、足元が留守になつていくぞ！」

セイバーは無防備に立っているキャスターに向け、曲げていた足を一気に伸ばした。腕が拘束されていたとはいえ、彼女の身体能力は目にも止まらぬ速さで彼の足元をすくう。

……はずだった。

「なに、かわした？」

「なかなか目ざといな。とはいえ、先程言ったはずだ、私から逃れることは出来ない」と

こやつ、余が動くよりも速く身を引いた。見切った……いや、予見していたのか？

キャスターは彼女が口を開くと同時に身を引いていた。まだ蹴り足を動かす前だというのに。そこになにか異様なものを感じ、セイバーは背筋に寒気を覚えた。

「さて、今さら前戯など必要ないだろう？ 早速頂くでしょうか」
キャスターの言葉に、セイバーは素早くうつ伏せに姿勢を変えて立ち上がろうとする。だが、それより速くキャスターのローブの下から何かが飛び出し、両足を絡め取った。

両膝が地面に着いていなければ、それを支えにして立ち上がることは出来ない。だが、片足は高く持ち上げられ、股を大きく広げた状態でキャスターに正対する形になった。

気丈に振る舞っていたセイバーも、つい頬を赤らめる。羞恥のポーズで身動きが出来ないことに、強く奥歯を噛みしめた。

「残念だったな。私に先んじて動くなら、もっと奇をてらったことをすべきだ。だが、君の行動パターンなど、既に把握済みだがな」

「ほう、余のことを随分と研究したようだな。熱心な信者というものは、時に鬱陶しくなるものだ」

「ククッ、私をストーカー扱いとはな。いや、それも仕方ないか。今度もなかなか楽しめそうじゃないか」

キャスターの物言いに違和感を覚えながらも、頭の中ではこの窮地を脱する方法を巡らせていた。セイバーの最大にして愛用の剣、エクストラクト・エグゾードの火は辺りに見当たらない。さっきから呼び出そうとしているのに、まるで反応がない。丸腰の状態では、さしものセイバーも為す術がなかった。

「……余に何をしようというのだ？」

「男が女にすることなど決まっているだろう？ 犯し、辱め、蹂躪

するのだよ。触手で子宮の奥までまさぐり、その滑らかな肌を舐め直し、苦痛と羞恥に涙と悲鳴を溢れさせる姿の楽しむのだ」

「なっ！？ き、貴様という奴は……！」

これから自分の身に降り注ぐ悪夢を想像し、セイバーはさらに頬を赤らめる。だがそれは羞恥よりも怒りの方が強く、四肢に力を込めて抵抗し始めた。

「下劣な者の思考に付き合っていられるか！ 余を蹂躪するなど、神が許しても余が許さぬ！」

「ふ……セイバー、君はやはりそうでなければな。怒り、抗い、罵倒する君を蹂躪することが私の楽しみだ」

「悪趣味な奴め……だが、貴様の好きなようには……ひいっ！？」

ドスン、と音を立てて、ロープの下から何かが零れ出ると、セイバーは思わず小さく悲鳴を上げていた。例えて言うならば、腫瘍に冒され肥大化し、ただれた腸のようなものだった。太く長い臓器には中に風船でも入っているのかと思うほど巨大な瘤がいくつも出来、表面には粘液が滴り怪しく輝いている。所々に血管も浮き上がり、あまりにグロテスクな容姿に、セイバーは目を背けた。

「まさか、それで余を犯すとい……ぎいいいいいっ！？」

その質問はあまりにも愚問だった。身体に巻き付いた触手達が股間の股布をずらしたかと思うと、極太の肉触手は容赦なく露わになった秘裂に突撃してきた。先端の細い触手が秘唇をこじ開けると、すぐに太い部分が密着する。だがそれもほんの一瞬のことで、セイバーが身を引くよりも早く、触手は一気に膣道にねじ込まれていた。

「が……あ、ああ……あああああっ！ 馬鹿な、余が、こんなものに犯され……ぎいいいいいっ！？」

全身から血の毛が引くのを感じながらも腰を引こうとしたが、逆に足を引っ張られてしまう。極太触手はいびつな凹凸で膣壁を削り

ながら、一気に子宮口に激突した。

「が……があっ、はあっ、はあっ……う、うあ、ああああ……」

「うむ、やはり君の悲鳴は実にいい。可憐で、苛烈で、美貌と強さを兼ね備えた君だからこそ成し遂げられる最高の娯楽だ」

「がはっ、はあっ……余を犯すことが……娯楽、だというのか？」

「勿論だとも。美しい蝶の羽をむしり、地面でのたうち回るようすを眺めるのが楽しいのと同じことだよ」

英霊でありながら女としての身体を蹂躪される苦痛と悔しさを覚えながらも、必死に反撃する方法を思考し続ける。

「さあ、次はその胸を楽しませてもらおうか。君の乳房は実に柔らか揉み心地がいいからな」

「ふん、貴様の妄想になど付き合っていられるか！ これ以上、余を愚弄する真似を重ねるのであれば、原初の火に焼かれることを覚悟するがいい！」

「いいぞ、実にいい。もっと私を罵倒しろ、強気な態度で抗え。そして自分の無力さに打ちひしがれながら飲み込まれていくのだ」

謳うように未来を予言するキャスターに、セイバーはなおも怒りを滾らせる。だが、置かれた状況は既に最悪だ。

粘液を滴らせながら上半身に近づいてくる触手に身をよじるが、豊満なバストを隠すことなど出来はしない。無遠慮に触れた触手の肉感に顔をしかめると、衣装が一気に引きはがされた。

派手な音を立ててブラウスが引き裂かれると、今まで衣装の中に収まっていた乳房が零れだした。一見しただけでも柔らかそうな乳房に、醜悪な触手が絡みついていく。

「くっ、離せ！ 汚い手で余に触るな！」

「吠えろ吠えろ。美しい君が罵声を浴びせる度に、私の心は躍る」
「貴様を喜ばせるなどまっぴらご免だ！ ひっ……ぎっ、うあっ、

触手がまた動いて……ぎゅうううっ！」

胸を締めつけられることに意識が集中していたせいか、下半身への警戒がおろそかになっていた。今までなりをひそめていた極太触手が突然動き出し、凹凸で膣壁を擦りながら引き抜かれていく。

「あ、あがつ、があああああつ！ ひっ、ひっ、ひぎいいいいいっ！」

まだほとんど濡れていない、柔らかな膣壁を、触手のざらついた肌が擦り上げる。身体の内側から焼けるような痛みが迸り、セイバーは目を見開き泣き叫んだ。

「ぐあっ、あつ、つううううっ！ や、やめろっ、何度も余の中に入ってくるなっ！ がっ、あつ、がああああああつ！」

お腹に力を込めて少しでも侵入を阻止しようとするが、すさまじい圧力が襲いかかってくる。内臓をかき回されるかのような突き上げが繰り返され、その度に腹の底から悲鳴を上げてしまう。

「余が、こんな無様に犯されるなど……ひっ、ぎっ、いいいいいっ！」

加速していく触手は膣壁をさらに痛め付け、セイバーの全身を痺れさせる。頭の中は痛みの中で頭がいっぱいで、ここから抜け出す方法など考える余裕はなくなっていた。

さらに乳房が触手で締め上げられ、先端の細い触手が乳首に巻き付いてくる。指を絡めるようにこねくり回されると、激痛の中にくすぐったさが混じってきた。

激痛の中のくすぐりはことさらセイバーを困惑させ、動けないながらもがいてしまう。その抵抗が無意味に体力を奪っていることに気づきながらも、セイバーは自分を止めることが出来なかった。

「あつ、あつ、がああああつ！ ひっ、ひぎっ、いっ、ぐゅうううっ！」

余の中がつ、子宮が潰れるっ、ひっ、ぎっ、ぎゅううううっ！」

「なに、最初からそこまで暴力的には犯しはしない。散々弄び、楽しみ尽くしてからでないともったいないだろう？」

「き、貴様あつ！ どこまでも性根が腐っているようだな……あぐうううううっ！」

膣内にねじ込まれた触手が中で回転し、膣がねじれてさらに激痛を生み出した。目の奥で何度も火花が散り、喉が焼けるほど絶叫を吐き出す。それでも膣を犯される痛みにはほど遠く、セイバーの心を打ち据えていく。

「それではそろそろくれてやるとしよう。私の所有物の証である、濃厚な精液をな」

「そんなものはいらぬ！ や、やめろ……中に出すな……あつ、あつ、奥を……奥を突くなああつ！」

太い触手が膣奥を何度も突き、子宮が押し上げられて吐き気を覚えた。身体を前に折り曲げているせいで腰が引けず、性器を穿つ衝撃はそのままセイバーを苦しめる。

「やめろ……余の中を穢す……わあああああああつ！」

乳首を絞り上げられると同時に、胎内に強烈な衝撃が走った。腹の中に熱い何かの流れし込まれ、内側から犯されていく感覚に、セイバーは必死に泣きじやくる。

「やめろっ、やめろやめろやめろおおっ！ 中に出すなっ！ 妊娠してしまうっ！ ひっ、ひっ、ひぎいいいいいっ！」

射精しながら脈打つ触手に膣道を激しく削られ、圧迫感と激痛が何度もセイバーの脳裏を焼いた。さらに他の触手も顔や乳房、太ももに濃い精液をぶちまけ、皇帝の権威を貶めていく。

「んぎっ、いっ、ぎいいいっ！ 中がつ、子宮が破裂するっ！ やめろっ、もう出すなあつ、やめ……ええええええっ！」

セイバーは絶叫を繰り返しながら、何度も身体を震わせる。

気丈に振る舞っていた顔が、次第に怯えた女の顔になっていく。その様子を、フーダの男は満足そうに眺め続けるのだった。



※

※

「あ……う……っ……はっ、はっ、うう……」

射精が終わった後も、セイバーは苦しみ呻き声を上げ続けていた。子宮の中には大量の精液が今も入ったままで、腹部の重みと熱さが、彼女に犯された記憶を絶え間なく印象づける。肌にまとわりつく精液は赤い衣装を淫らに穢し、気高さを卑猥さに塗り替えていた。「さて、そろそろ落ち着いてきたことだろう。自分が一体誰のものか、理解したかね？」

キャスターは相変わらず口元だけを見せながらセイバーに語りかける。顔色は見えないものの、その唇が彼の絶対の自信と優越を現していた。

常に自分の我を通し、自らを美の頂点と口にしてはばからなかったセイバーにとって、この状況は耐え難い屈辱の渦の中だった。

「はっ、はっ……寝言は寝てから言うものだ、下郎。この程度で余の全てを支配したなどと思うとは、傲慢にも程があるぞ」

「ふ……ククク……堪らないな。君に罵倒されると、どうも胸のくすぶりが高まってしまう」

「ふん、どうやら貴様は相当の変態らしいな」

いまだに身動きが取れず、触手に股を開かされた羞恥のポーズを取らされているというのに、セイバーの言葉は自信と傲慢に満ちていた。

触手の乱暴な抽送を受けたせいか秘唇はわずかに開き、痛々しい赤色に染まりながら小さくひくついている。秘裂の隙間からは、呼吸に合わせて精液が溢れだし、彼女の胎内に流し込まれた汚毒の量を推し量らせるかのようにだった。

「結構、それだけの余力があるのなら、まだ楽しめるといふものだ」
セイバーは奥歯を噛みしめ、キャスターを睨みつける。だが、現状ではそれ以上の抵抗が出来ないのも事実だ。

穢されたショックを強い意志で押さえ込み、それを怒りに変えて闘志を燃やす。下腹の熱と重量に持病の頭痛が刺激されるが、それと同じように噛みしめて痛みを飲み込んだ。

「貴様がそんな余裕を吐いているのも今のうちだぞ！」

「ほう、ではなにかこの事態を打開する方法でも見つかったのかね？」

「……まだだ。だが、必ず見つけてみせる」

「その意気だ。もっと悩み苦しむがいい。その先に、この事態を変える活路があるのだからな」

「なんだと……？」

セイバーはその言葉に、つい首をかしげてしまう。

「なに、今は分からずとも時期に理解出来るさ。私の責め苦を受けたいれば、いずれな」

キャスターの言葉に歯ざしりし、悔しさに爪が手のひらにめり込む。そのセイバーを嘲笑うように、触手が突然動き出した。

「くっ、今度はなにを……うああっ！」

足を引っ張られて身体が地面を擦り、つい悲鳴を上げてしまう。

さらに頭をぶつけて痛みをめまいを覚えていると、その足は急に上へと持ち上げられた。そのまま釣りでもするかのように触手はしな

りながら上へと伸び、セイバーを足から持ち上げていく。ほどなくして、彼女の身体は地面から離れ、キャスターの前で股を広げたまま逆さ吊りになるという、さらなる羞恥のポーズを取らされた。

「く……余をここまで辱めるとはな……」

「逆さ吊りにした程度で、そこまで顔を赤らめるとはな。いや、単

「その両方だ、下郎め！」

キヤスターの触手はおそらく何らかの能力。これだけの力を発揮するとなると、マスターが必要なはずだ。余が力が出ないのは、なんらかの手段で奏者との隔絶が起きているからに違いない。となると、ここはこやつで作った結界の中、と考えるのが妥当か……。

「さて、それでは続きと行こうか。君の美しい悲鳴を聞かせてくれ」

「貴様を楽しませることなど、何一つしてや……がつ、あああああ

触手がセイバーの身体に対してまっすぐになったかと思うと、突然彼女の四肢が上へと引っ張り上げられた。重力に強く引っ張られる感覚と同時に膣道を極太触手に貫かれ、絶叫が吐き出される。

「ふむ、実にいい。股を裂かれ、自ら触手を飲み込み苦痛にのたうち回る君の姿と嬌声は、至高の愉悦だ」

今度はセイバーを掴んでいた触手のテンションが緩み、自重で地面に叩き付けられそうになる。身体が落ちることで触手が引き抜かれ、限界まで広げられた膣襞が激しく擦れ合い、火がつくかと思うほど激痛と熱さに見舞われる。頭頂が地面に激突するかと思った瞬間、セイバーの足に力がかかり、股間の激痛と共に動きが止まった。

「はっ、はっ、はあっ……これが、貴様の次の責めということか……んぎいいいいっ！」

引き上げられる度に両足が左右に引つ張られ、股関節の激痛で膣が締まる。と同時に触手がねじ込まれるせいで、二重の痛みが彼女を襲った。さらには頭に血が上るような感覚が耐えようとする氣力を奪い、激痛の波が心を打ち砕こうとする。引き抜かれる時は飛び下りるかのような落下感と共に膣襷が擦られて熱く燃え上がり、膣を抉る痛みが恐怖をさらに煽った。彼女の自慢の一つである豊満な乳房は身体の上下で大きく揺れ、それが逆に抽送の刺激にさらなる衝撃を与え、自身を苛む。

「はっ、はぎっ、ぎいいいいっ！　中がっ、余の中がっ、あつ、あつ、がああああつ！　削れ、るっ、んぐっ、んぎっ、いいいいっ！」「どうした、私に対する怨嗟は終わりか？」

「なにを！ 余の貴様に対する怒りは、この程度で砕けはせぬぞ！」
触手に締めつけられた四肢は赤く腫れ上がり、鈍痛を与えてくる。
さらに挿入の度に股関節の激痛は強くなり、彼女を弱らせていく。
それでもまだ、彼女は自分が耐えられると信じていた。

「そうなくてはな。毎回一本だけではつまらないだろう、もう一本追加してやろう。なに、この程度で死にはしない。英霊がこんなもので死んでは、それこそ末代までの恥だろう?」

キヤスターはセイバーを上下に揺さぶりながら、彼女のプライドをくすぐってくる。その安い挑発に乗せられ声を荒げようとした瞬間、彼女の秘裂が引き裂かれた。

「があああああつ！ 中つ、中がつ、股が裂けるうううううつ！」

既に極太触手により押し広げられていた膣穴が強引な触手の追加でさらに押し広げられ、筋組織が音を立ててちぎれていく。それでもまだ膣壁はその形を崩すことなく二本の触手を受け止め、子宮への道を死守しようと凹凸のついた肉肌に張り付いてくる。

「ひっ、ひっ、ぎいいいいつ！ 馬鹿なつ、こんなもの、入るわけがつ、あつ、あつ、があああああつ！」

胎内の精液を噴出させながら、触手がなおも膣道を蹂躪する。あまりの痛みに脳裏で何度も火花が散り、と同時に脳裏で記憶が激しく刺激された。喉が焼け付くほどの悲鳴、精液と触手に身体を蹂躪される熱さ、暴虐の中で次第に心の底から追い詰められていく感覚。それらはまるで、以前にも同じ責め苦を受けていたかのように、セイバーの脳裏に甦ってきた。

「な、なんだこれは？ 余はこんな辱めを受けるのは……んぐつ、あぐつ、うううううつ！」

後から挿入された触手は、膣内で苦しそうに暴れ回り、きつい抽送にさらなる激痛を与えてくる。

胎内で繰り広げられる暴力的な激痛に強弱の波が加わり、セイバーの精神を疲弊させていく。それが彼女を構成する霊子を刺激し、彼女の記憶を揺さぶった。

「ほう、今回は随分と早かったな。ならば、記憶を辿りながら責め苦を楽しむといい」

「キヤスター！ 貴様、何を言っている！ この記憶はなんだ？ 余は、余は……あつ、あがつ、があああああつ！」

セイバーの脳裏に何度も触手に膣を抉られ、口にほおばられ、精液をその身に受け続けた光景が浮かんでくる。それはあたかも、彼女が凌辱を受けていたことをすっかり忘れていたかのように。

「嘘だ、こんなことがあり得るはずが……あつ、あああああつ！」

記憶は肉体をも侵蝕し始め、痛みと共に熱さが加わってくる。脳裏でちりちりと焼ける感覚に、セイバーは恐怖を覚えていた。

「ダメだ、思い出すでない！ それは開けては……ひいいいっ！」

極太の触手が膣奥を穿ちながら、もう一方の触手が膣壁を舐めるように叩いてくる。それが彼女の記憶と肉体を刺激し、蹂躪し、喰らっていく。

「さあ、これで思い出すがいい。お前の子宮を穢す白濁が真実を教えてくれるはずだ」

「やめろ……やめ……いや……あ、あ、ああああああつ！」

セイバーの絶叫と共に、精液が子宮を満たしていく。英霊でありながら女性としての部分を貪られ、身体が自然と反応して全身が激しく痙攣を起こす。その中で、セイバーは否応なく記憶を引きずり出されていく。

「そうだ……余は、何度も貴様に犯され……あ、あ、あ、あああああつ！」

今までの凌辱の記憶と今現在の凌辱の感覚が折り重なり、セイバーを二重の射精が追い詰める。頭の中で何度も爆発が起こり、必死に耐えようとしていた感覚がひび割れていく。

「だめだ、だめ……やめろ、それ以上出すなっ！ このままでは……あ、い、イクつ、うううううううううつ！」

瞬間、セイバーの視界が真っ白になり、そのまま意識が溶け落ちていく。遠ざかっていく現実感の中で、セイバーは自分が敗北したことを認識するのだった……。



※

※

「んっ、んあ……んっ、ううう……」

暗闇の中、セイバーは小さくうなり声を上げながら身をよじった。だが、全身がタールの中に漬け込まれているかのように重く、自由が利かない。顔の火照りと下腹部の異様な圧迫感、そして何かが股の間からはみ出ているかのような違和感に、眉をひそめながらゆっくりとまぶたを開いた。

「う、うあ……ここは……っ!? キヤスター!」

「おはよう、セイバー。その様子を見ると、目を覚ましてすぐに状況を理解したようだな」

相変わらずフードに顔を隠し口元だけを見せるキヤスターは、唇の端を吊り上げて笑う。

言い返そうにも、セイバーは自分の敗北を認めてしまった。それはどんなに言い繕おうとしても覆せない、自らが認めた烙印だった。

「よもや、このような形で聖杯戦争を終えることになるうとはな。奏者には顔向け出来ん……いや、恐らくは再び目にすることも叶わぬのだろうな」

「後者については肯定しよう。だが、前者に関しては、まだ終わってはいないな」

キヤスターの言葉に、セイバーは再び首をかしげる。

最初から言葉の裏に何かを潜ませていた口調だったが、その全容はいまだ知れない。とはいえ、今のセイバーに真実を見つけ出す気力はなかった。

「君が心の底から私にかしずき、私の物になった時、君は聖杯戦争に敗北したことになるだろう。だが君はまだ、心の中で私を拒絶し

ている」

「……貴様は何が言いたい？ 聖杯戦争に勝つことが目的ではないのか？」

「聖杯戦争など、私の目的の結果に過ぎない。むしろ、聖杯戦争を勝ち抜いてしまっただけでは面白くないのだよ」

こやつ、一体何を言っているのだ？ 余を我が物にしようという意図は見えたが、こやつにとっては、聖杯戦争を勝ち抜くこと以上に重要だというのか？

「なに、理解してもらおう必要はない。ただ君は抗い続けられればいい。私の渴望を満たす、その美声をもつてな」

瞬間、下腹部に強烈な痛みが走った。まるで、丸太で串刺しにされたかのような圧迫感と激痛が股間から脳天まで突き抜け、思わず顔を反らして絶叫してしまう。

「んぎいいいいいいっ！ ひっ、ぎいっ……また、触手かつ！
があああああつ！」

目尻に涙を浮かべながら下を見ると、足を折り曲げて拘束されたその間に、あの極太触手が突き刺さっていた。だが、よく見ると先程の触手より一回り大きい。

セイバーの二の腕ほどもある太さの触手が胎内にねじ込まれていることに、思わず歯の根が震え耳障りな音を奏でた。

「あ、あ、ああ……こんなに太い触手が余の中に……嘘だ……今度こそ、本当に死んでしまう……」

呟いた瞬間、また脳裏にフラッシュバックが起きた。それは極太触手を眺めながら、今言った言葉を以前にも呟いた記憶。唇が震え、手に触手を握られ、白濁にまみれた身体をひたすら蹂躪された記憶。その最後には、津波のような熱さが押し寄せ、痛みも忘れて感情を押し流される、あの快楽の渦に飲み込まれていく記憶だった。

「なんだ、これは……余が、こんなものに犯されて、肉悦に溺れるなどあり得ぬ……」

「またひとつ思い出したようだな。その調子だ。そのまま少しずつ思い出していくといい」

キャスターは謳うように囁きながら触手を動かす。ずるりと触手が抜けていくと、膣壁が引つ張られてそのまま体外に引きずりだされるかのような錯覚に陥る。だが、すぐに触手は引き返し、今度はうねりながら膣奥に向かってめり込んでいた。

「んぎっ、ぎっ、いいいいいいっ！ や、やめろ、中で暴れるなあああっ！」

「気に入ってもらえたようだなによりだ。簡単に快楽に溺れてもらっては困るからな」

「き、貴様は……余をどうしようというのだ？ んがっ、あがっ、がっ、ああああああっ！」

必死に悲鳴を堪えようとしても、腹の底にまで響く抽送に、声が溢れ出てしまう。あまりの痛みに指先までも痙攣し、力が入りっぱなしになってものがくこともままならない。触手が引きずり出される度に秘裂から大量の精液が掻き出され、地面に汚らしい音を立てながら飛び散っていった。

「何故だ？ 何故余にこんな記憶がある？ んぐっ、ぎっ、ひっ、ひっ、ひいいいいいいっ！」

子宮口に触手がめり込み、そこでむずがるように暴れると、子宮が急激に熱くなって身体が勝手に暴れ出す。激痛を覚えながらも、その奥から熱い奔流が溢れだし、セイバーの恐怖を煽った。

「そうだ、苦しみながら考えるがいい。君がなぜ、私に犯される記憶を持っているのか。君が思い出すほど、私は楽しくなる」

余はキャスターに記憶を操作されているのか？ それとも、キャ

スターに以前の記憶を封印され、それが徐々に解けているのか？

考えても答えは出ず、ただ柔肌を蹂躪される苦しみが、甦ってくる記憶と重なってさらなる凌辱を生み出す。触手の抽送で腰が前後に動く度に頭痛が激しくなり、セイバーを追い詰めていく。

「あがっ、がっ、はあっ、ひいっ、ひぐうっ！ はっ、はっ、ん……？ なんだ？ なにか、おかしい……」

抽送で悶え苦しむ中、セイバーはようやく違和感に気づいた。膣道を責め立てる凶悪な触手について、耳に聞こえる声におかしなものを感じていたのだ。それは、いつも聞いている自分の声より高い、変声期を迎える前の少女のような音程。

「な、なんだ？ 余の身体が、小さくなっている？ んぐううっ！」

「ようやく気づいたか。なに、ちよっとした余興だ。ただ犯すだけでは飽きてくるだろう？ 君の身体を少し幼くすることで、その膣も小さく狭くなると思つてな」

「き、貴様あああっ！ 余を蹂躪するだけでは飽きたらず、余の美貌までも蔑ろにするつもりか！ んぐっ、ぎっ、ひぎいいいいっ！」

セイバーの叫びに呼応するかのように触手の動きが速くなり、膣壁がまた削られるかのように擦り上げられる。実際、身体が小さくなったことで膣は幼くなり、先程までねじ込まれていた触手をさらにきつく締め上げていた。最初に感じた極太触手の太さの違いは、彼女自身がもたらしたものだ。最初に感じた極太触手の太さの違いは、

「はっ、はひっ、ひっ、ひぐっ、ぐうううっ！ さっきより、敏感に……んぐっ、ぎっ、ひううううっ！」

痛みは歯を食いしばって耐えられるものの、それに対抗するかのうように焼け付く炎がセイバーを襲う。

子宮が強烈な疼きを覚え始め、犯されているのに感じ始めている自分に、恐怖と悔しさで涙がこぼれ落ちた。

「なに、落ちるにはまだ足りんよ。うわべだけ私にかしずかれても、何の意味もない」

いる。セイバーの中にまだ光が残っていることに、愉悦の笑みを浮かべながら。



「あ……が、がはっ、はっ、はあっ……お、思い出したぞ、キヤスター」

射精が終わり、セイバーは肩で息をしながらその言葉を吐いた。既に全身は弛緩し、指先は力なく丸まっている。力業で触手を振り払うことなどもう願うことすら出来ないのは、その様子を見れば明らかだった。

「ほう、聞こうか。君がどこまで思い出したのか」

「貴様は、余を結界に閉じ込めているのだな？ はあっ、はあっ……そして、余の精神を蹂躪し続けている……」

「ふむ。それで？」

「貴様は余が疲弊しきると、記憶を封印してまた余を犯す……そうやって、余の精神を削りきろうとしているのだ」

「なるほどな。だが、それならば、疲弊しようとそのまま犯し続ければいいのではないかね？」

「それはおそらく……はあっ、はあっ……時間制限が、あるのだ。この結界を維持出来る限界が……」

セイバーが脳裏に甦ってきた記憶の断片から導き出した答えに、キヤスターは黙り込む。

セイバーは絶頂を続ける中、過去に自分が放った言葉を思い出したのだ。

「余は以前、こう言ったはずだ。どんなに余を穢そうとも、余の心を打ち砕くことなど出来はしない……と」

触手に穴という穴を犯され、その身に精液を浴びて絶頂を繰り返しながらも、必死に紡いだ言葉。過去の自分が未来に向かって放った大いなるエールに、彼女の心の炎は再び勢いを取り戻していた。「つまり、お前は私を犯す間、この結界を張り続けなければならぬ。」

余が折れるよりも早く、貴様の魔力が尽きれば余は解放される……」

「なるほど、ようやくそこまで辿りついたということか」

「この結界は所詮貴様の精神攻撃。どんなに苦しくとも、抜けだしてしまえばダメージなどないも同然」

「肉体さえ疲労していなければ、私を切り伏せるのは容易か……だが、それまで耐えられるかな？」

セイバーが問いに答えようとした瞬間、その身体はうつ伏せにされた。触手がねじ込まれたままのせいで膣が激しく揺れ、激痛に涙が溢れてしまう。

「んぎっ！ だ、だが……この程度で、余を打ち砕くことなど出来はせぬ！」

「ククッ、随分と勇ましくなったものだ。だが、それでこそ楽しみ甲斐があるというものだ」

企みを看破したとはいえ、キヤスターの優位に変わりはない。だが、この地獄から抜け出す光を見つけた以上、彼女に諦めるという言葉は消え去った。まだ、彼の引いたレールの上に乗っていることを思い出せないまま……。

※

※

「んっ、ぐうっ……今度は余に何をするつもりだ？ 貴様の靴でも舐めろとでもいうのか？」

うつ伏せに倒されたセイバーは腕を引つ張られ、腰を浮かされる。疲弊した身体では満足に起き上がることも出来ず、前のめりの格好で固定されていた。目の前には薄暗い地面が広がり、今まで吐き出された精液や、きらびやかだった衣装が散乱している。その無惨な光景に眉をひそめながら、セイバーは再び気丈に振る舞っていた。「なに、そんなつまらんことはしない。私はただ、君を苦しめたいのだからな」

上から降り注ぐ声に苛立ちを覚え、持病の頭痛がまた強さを増す。苛立ち募るものの、これも戦いだと認識したセイバーは、ゆつくりと息を吐いた。

「今さらどんな屈辱も甘んじて受けよう。だが、この借りは数倍、いや数千倍にして返してやる。ふふふ……その時が実に楽しみだな」
「ク、ククク……クハハハッ！」

腹を抱えて笑い出したキャスターに、冷静でいなければならぬと思いつつも、つい顔を上げてしまう。精液を滴らせ、豊満な乳房を揺らしながら視線をキャスターに向けて睨みつけると、彼は謝るかのように手を折った。

「いやはや、さすがに笑い過ぎか。君があまりにも分かりやすいのだな。その言葉、さつきも一言一句変わらず聞いたのでついな」

「ふん。ということは、貴様が何度余を辱めようとも、陥落させることは出来ぬということだな」

「なるほど……そういう考え方も出来るのか。いやはや面白い」

セイバーとしては理論の穴を突いたつもりだったが、まるで狼狽えないキャスターにまた苛立つ。

だが、彼女への返事は、言葉ではなかった。

「んぎいいいいいっ！？」 な、なんだこの痛みは……余の膣ではない……それよりも後ろの……ひぐうううっ！」

「不意打ちには弱いな、相変わらず。君のおしゃべりに付き合って、体力を回復させても仕方ないだろう？」

「んっ、ぐっ、ぐうううっ！ この触手……まさか、余の尻穴を犯しているというのかっ！」

怒りと屈辱にキャスターを睨みつけるものの、相変わらず緩んだ口元は変わらない。

肛門にねじ込まれた触手はあまりに太く、焼け付くような激痛と共にセイバーの頭痛を加速させる。

「ひっ、ぎっ、ぎいいいいいっ！ 馬鹿な、こんな不潔な行為を……んがっ、あっ、があああああっ！」

より深く、勢いよく直腸に触手がねじ込まれ、セイバーは歯を食いしばり泣き叫ぶ。あまりの激痛にお尻に力が入ると肛門が締めまり、自ら痛みを助長してしまう。

さらにその痛みは膣にも響き渡り、収縮して既に挿入されている触手を絞り上げる。膣壁が触手と擦れてまた痛みと快感を覚え、さらに直腸の触手が外から擦り上げて彼女の苦悦を引き出していく。

「はっ、はっ、んぐうううっ！ こ、これしきのこと……余が屈するものか。あっ、あぐっ、ぐっ、んんんっ！」

「涙を溢れさせ、唇を震わせながら語ったところで、まるで説得力がないぞ、セイバー」

「だ、黙れえっ！ こ、これは……貴様をなます斬りにする様を想像して震えているのだっ！」

想像以上の痛みに、涙を止めようと思っても逆に溢れるばかりだ。全身に力が入り、指は虚空を何度も掴みながら震える。腕に絡みついた触手がセイバーを揺らすと、地面に何度も乳首が擦れ、むず痒い微悦が湧き上がってくる。だがそれ以上に、膣と直腸の触手が激しく擦れ、気が狂いそうになるほどの痛みと快感が体内で荒れ狂った。

「ひっ、ひっ、ひぎいいいいっ！ 腹の中で暴れるでないっ！ がふっ、げほっ、ぐううううううっ！」

触手達はあまりの狭さにむずがるように、中で身体をくねらせセイバーの内蔵を荒らす。全身を痺れさせるかのような痛みと悲鳴と涙は途絶えることがなく、股間からも痛みを少しでも和らげようとするかのように愛液が溢れだした。

「さて、そろそろ始めようか。君の苦しみ悶え、叫ぶ様を楽しむでしょう」

「な……に……？ この凌辱がお前の本懐ではないというのか？ んっ、ひっ、ひいひいひいひいひいひいっ！」

さらなる責めが始まることに背筋が寒くなった瞬間、それは襲いかかった。腹の中にマグマが流し込まれたかのような熱さと重みのしかかり、セイバーの身体が地面に倒れそうになる。だが、また触手が腕を引いて持ち上げると、さらなる奔流が体内に襲いかかった。

「あっ、あっ、あああああっ！ まさか貴様、射精させているのか！ 私の子宮と、腹の中に……いつ、うあっ、わあああああああああっ！」

子宮に射精されただけでもあまりの熱さと圧迫感に意識が飛ばされていたのに、今度はさらに直腸にまで精液が放たれる。お腹の部分だけ重力が増したかのように重くなり、セイバーの身体が激しく

揺れた。

それは膣壁と肛門を容赦なく摩擦し、強弱の激しい虐悦となってセイバーを苦しめる。

「はひっ、ひっ、ひいひいひいひいっ！ こんなっ、こんなあああああっ！ 飛ぶっ、意識がっ、あっ、があああああっ！」

「なに、意識が飛んでもすぐに目を覚ますさ。なにせ、この射精は当分終わらないからな」

キャスターの言葉に、セイバーは歯の根が噛み合わなくなった。耐えて反撃することを意識してはいるものの、耐え難い肉体への精神攻撃に、彼女の正気が削られていく。

「いつ、いつ、いぎいいいいいいっ！ 出すなっ、もう出すなっ！ 腹が破裂するっ、ううううううううっ！」

上半身を激しく上下させながら、セイバーは必死に泣き叫ぶ。胎内と直腸に射精される度に背中が反れ、激悦に頭の中が飽和しそうになる。そこで意識が途切れそうになると力が抜け、地面に激突しそうな勢いで前に倒れ込んだ。すると触手が中で強く擦れてその刺激で目が覚め、顔が激突しそうになる直前で状況を理解させられる。

意識が戻る度に顔面をぶつけそうになり、単純ながらも強力な恐怖が植え付けられる。涙と、悲鳴と、射精にまみれ、セイバーはひたすら暴れ回った。

「んぎっ、ぎっ、いいいいいいっ！ うえっ、うぶっ……なん、だ……腹が、腹が……ううううううっ！」

「そろそろ来たようだな。ここからが本場だぞ？」

キャスターの言葉に、セイバーはその真の意味を理解してしまった。直腸に押し込まれたまま引き抜かれることのなかった触手。絶え間なく流し込まれ、膣穴から噴き出すのと同じ量だけ体内に流し込まれた精液は、一体どこに向かうのか。答えは一つだった。



「やめ……もう出すなっ、あ、あ……うぶっ、うつ、ぐぶっ……ぶええええええええっ！」

喉を焼く胃液に目を見開きながら、セイバーは白濁を吐瀉した。それは射精のタイミングに合わせて喉からひり出され、舌にねつとりと絡みつきながら漏れ出していく。

「うえっ、ぶえっ、うぶあああああっ！　ぐぶっ、ぐぶおおおおおっ！」

射精で絶頂しながら、口から勢いよく精液を吐き出すセイバー。自らの吐き出す汚濁液を味わわれ、涙がさらに流れていく。

「き、きざまあああっ！　あぶっ、ぐぶっ、ぶええええっ！　うぶっ、ぐぶっ、うぶおおおおおっ！」

「実にいい、いいぞセイバー。君は実に美しい。その肢体が白濁に穢され、無惨になればなるほど、君は淫らに輝く」

謳うように言葉を紡ぐキャスターに、セイバーはなおも精液を吐きながら睨みつける。快感と苦痛と屈辱にまみれながらもまだ壊れないのは、彼女が英霊たる素質の持ち主だからだ。

だからこそ、この凌辱が彼女を苦しめ続ける。

「キャスター……おぼえでおれえっ……うぶっ、ぶあっ、あああああああああっ！」

怨嗟の声を上げながら、セイバーはイキ続ける。怒りと言う名の心の支えにしがみつきながら。

※ ※

「余は……一体……どう、なったのだ……？」

ふと気がつく、あれほど目の前にあった地面が、随分と遠くになっていた。四肢には相変わらず触手が巻き付いており、二穴にもしっかりと異物の感覚が残っている。全身が火照っているものの、彼女の好きな湯浴みのような感覚はない。薔薇の香りはむせるような匂いに変えられ、肌を流れる湯の代わりに、粘り気のある液体が全身にまとわりついていった。

「吐き気が……する。口の中も……最悪だ。口をゆすぎたい。奏者……水をくれ……」

ぼんやりとしているせいか、自分の現状を半分認識しながらも、マスターの名を呼ぶ。当然ながら返事があるはずがなく、しばらくしてからその事実に思い当たった。

「そう、か……余は、キャスターの精神攻撃に囚われているのだっ
たな……」

少しずつ意識が戻ってくると、自分の置かれている状況が浮かんできた。全身は鉛のように重く、頭痛もひっきりなしに責め立ててくる。なにより、下腹部に鎮座している異物の感覚が、絶え間なくセイバーに吐き気を催させていた。

「気分はどうかね？ その様子だと、随分と疲弊しているようだが」「ふんっ……案ずるな。貴様の望み通り、まだ屈するつもりはないぞ……」

膣内をゆっくりと擦り上げられて気持ち悪さと快感が絶え間なくセイバーを責め立て、心を摩耗させていく。自分のなすべきことをうち捨てて楽になりたいという思いが脳裏をよぎるが、キャスターに嘔みつくことで振り払おうとした。

「それは頼もしい。ではもう少し味わうといい」

「な……んぐっ、あっ、あぐっ！ また余の中で動いて……うあ、あ、ああああっ……」

膣と尻穴に刺さったままの極太触手は、互いにねじれながら抽送を繰り返す。

肛門と膣壁が引きずられて刺激され、鋭い痛みが膣の感覚を鋭敏にし、いつしか肉悦を覚えるようになった性器を蹂躪する。肉体は彼女の意志に反して勝手に快感を覚え、肉悦に全身を震わせた。

「うあ、あ、あひいっ！ ひっ、ひっ、ひんっ、うえっ、ごぼっ、うえええっ！」

子宮に精液が詰め込まれているせいか、肉悦で収縮する様子がつぶさに伝わってくる。そのせいで思わす嬌声が漏れ、さらには胃の中の精液がまた逆流し、口から溢れ出た。

胃液と共に喉を焼きながら出てきた精液は彼女のふくよかな乳房に零れ、白い肌をより白く彩る。だが、その光景は彼女の美意識を逆撫でする汚らしさで、また吐き気を催してしまう。

「こん、な……屈辱……いつまでも、んぐっ、ふあっ、あっ、あんっ、んんんんっ！」

「残念だが、君が落ちるまでは続けるつもりだ。君は自覚していないだろうが、随分と参っているようだからな。そうだな……もう二、三周すれば落ちるだろう」

もう二、三周だと？

余の記憶を奪い、また同じような責め苦を与えるつもりなのか！

だが、そうはいかん。この周回で貴様の精神攻撃を破ってみせる！セイバーは心の中で呟き、じわじわとせり上がってくる快感に抗おうと理性をフル稼働させる。それでも肛虐のひりつく痛みと膣を

「んあつ、あつ、あつ、はあつ、ふあつ、んんんっ！ ま、またイクというのか？ こんな屈辱を受けながら、余の身体は性欲に抗えぬというのか……！」

「その通りだ。君の身体は、犯されるほどその快感を覚え、痛みと苦しみの中で肉欲に溺れていく。それはもはや底なし沼と同じなのだよ」

「だ、黙れっ！ 余は……貴様に負けはせぬ！ んあつ、あつ、あひつ、ひいひいひいっ！」

触手が勢いよく子宮口を穿ち、セイバーは顎を突き出して可愛い悲鳴を上げてしまう。肉体が幼くなったせいか声も以前より高くなり、悲鳴に悶える自分の声さえも弱々しく聞こえてしまう。

「だ、だめだつ！ イクなつ！ 余は負けてはならぬのだ……あつ、あつ、あつ、うあつ、ああああああつ！」

触手が身体を振りながら勢いよく突き込まれた瞬間、子宮口が強引にこじ開けられた。触手の先端が子宮壁を穿ち、セイバーのお腹が触手の形に大きく膨らむ。

「ひつ、ひいいいいつ！ 余の身体がつ、お腹がつ、こんな……
抜けつ、抜けえええつ！」

「今度はこのまま射精するでしょう。子宮が破裂するかもしれんが……なに、気にすることはない」

「う、うあ、あああああつ！ 馬鹿な、そんなことをすれば、余は死んでしまうつ！ ひつ、ひんつ、ひぎいいいっ！」

子宮を中から持ち上げるように抽送する触手に、再び激痛が脳裏を焼く。と同時に激悦が迸り、痛みと快感の区別がつかなくなつてひたすら絶叫を繰り返す。

「おやおや、まだそんなにも元気な悲鳴を上げられるのか。ならば

「ひぐつ、はぐつ、ぐうううつ！ 貴様は、どこまで余を愚弄すれば気が済むのだ！ あぐつ、あつ、うえつ、うぐううつ！」

抽送はなおも加速し、突き上げられる度にセイバーの下腹部がいびつに膨らむ。尻穴も肛門をほぐすかのように触手がうねり、あまりの痛みに股が裂けるのではないかと思うほどだ。

「それではそろそろ今回の終幕と行こうか。壊れる分には構わないが、死なれては困るからな」

「うぐつ、くつ、んつ、んあつ、あひいいいいつ！　く、くるつ、くるううつ！　こ、これを耐えれば、余は……余はあああああつ！」

セイバーは己の逆転を信じ、必死の抵抗を試みようとする。と同時に、子宮壁に精液が直撃した。

下腹が触手の輪郭を超えて膨らみ、同時に秘裂から精液が勢よく噴き出す。さらに尻穴からも精液が噴出し、地面に勢いよくぶちまけられていく。身体が射精の勢いで上に向かって押され、肩関節と股関節が激痛の悲鳴を上げた。

「あああああつ！　　があああああつ！　　いつ、いつ、い
ぎいいいいいいつ！」

精液が無様な水音を立てながら噴出する度、小さくなつたセイバ
ーの身体が大きく跳ねる。目を剥き、口から絶叫と精液を吐き出し
ながら泣きわめく様は、彼女がいかにも追い詰められているかを如実
に現していた。

「イツ、イグツ、またイグ うううううううつ！ ううううつ、うぐああああああつ！」

脳内が熱く焼け焦げ、絶頂に何度も理性を押し流される。プライ

ドはズタズタにされ、気力も体力も根こそぎ奪われ、ただひたすら翻弄される。視界が何度も明滅するもののすぐに射精で叩き起こされ、激流に晒されてしまう。それはもはや、快楽と言う名の拷問だった。

「あ、い、いいいいいい！ イグッ、イグイグイグううううううううう！」

ビチャビチャと激しい水音を立てて股間から精液が吐き出され、彼女の耳を犯す。乳房に巻き付いた触手がさらにセイバーを苦しめようと絞り上げ、乳首を先端で弄んだ。

「や、やめ、乳首っ、触るなああああ！ あっ、あひいいいいいっ！」

乳肉を乱暴に締め上げられる痛みで膣が収縮し、自ら射精を促してしまう。さらに乳首を責められて快感が歯を食いしばろうとする意志を弛緩させ、抵抗を許さない。

「流されるうううっ！ うあああああ！ あひっ、ひっ、ひいいいっ！ やめろっ、もうイキたくないっ、いっ、いっ、いやあああああああ！」

耐えきれなくなつて泣き言を言い出したことも、自覚はなかった。ただ、脳裏には以前にもこうして犯されながら連続絶頂をくり返した記憶が甦り、今の記憶とない交ぜになつて彼女を絶頂の中の絶頂へと導く。

記憶に過去の肉体を食られながら、同時に今、触手に犯され絶頂をくり返す。それは、精神攻撃というには、あまりにもリアル過ぎる感覚だった。

「こ、壊れるっ、ごわれるうううううっ！ あ、あ、あ、あ、あああああああああ！」

一際長い射精が子宮と直腸を穿ち、セイバーは身を乗り出すよう

な格好で長い悲鳴を上げた。そして射精が終わると、事切れたかのようにがくりと頭を垂れた。

「あ……い、いあ……もう……出さないで……くれ……イキ……たく、な……」

心に刻み込まれた射精の恐怖は、半ば朦朧とした意識の中でも哀願をくり返させる。そんなセイバーに、キャスターがゆつくりと近づいてきた。

「よくぞ耐えたな。だが、さすがに次は肉体が持たないだろうな。では、そろそろ巻き戻すでしょう」

「……ま……き……もど……す？」

キャスターの言葉を、セイバーはすぐに理解出来なかった。首をかしげようとするものの力が入らず、うなだれたまま涙と精液を垂れ流し続ける。

「君は大きな勘違いをしていたが、別に正す必要もないと思ってな。私の結界は、精神攻撃ではないのだよ」

耳元で囁くキャスターの言葉を、セイバーはまだ理解出来ない。ただ、自分が大きな勘違いをしていたことに気づき、唇が青ざめ始めた。

「私の結界は、外界との時間軸を切り離す力があるのだよ。君が精神攻撃に過ぎないと思っていた過去の記憶や今の苦痛や快楽は、全て現実のものだ」

セイバーの目がうつすらと開き、まぶたが痙攣を起こし始める。わなわなと震える唇からは、声も漏れ出てこない。

「君は、ムーンスセルの特徴をあまり理解していないようだ。アレは全ての事象を記憶する。私が君と共に巻き戻っても既に起こった事象を消し去ることは出来ない」

「なに……を……言……言……い……る……？」

「このままでは君の肉体は凌辱に耐えきれず崩壊する。そして、私
もいつかは結界を維持出来なくなる。だから、君を捕らえた時間ま
で巻き戻していたのだよ。そうすれば、君の肉体は復活し、私の魔
力も元通りだ」

キャスターの言葉がようやく理解出来たのか、セイバーの震えが
さらに大きくなる。目を見開き、瞳孔を小さくして愕然とする様を、
キャスターはじつと眺め続ける。

「だが、ムーンセルは、いや……私や君を構成する霊子は、経験を
記憶している。君は犯されて巻き戻る度に身体が凌辱の記憶を蓄え、
さらに身体が敏感になっていく」

「ば、馬鹿な……ならば、余の記憶は……全て、本物だというのか
……そして、次も同じように、記憶を取り戻しながら犯されるとい
うのか……」

「そういうことだ。そしてその記憶は折り重なり、さらに君を責め
立てるだろう。全てに絶望する、その時まで……な」

「あ、あ、あああ……っ！ 貴様……この話をするのは……何度
目……だ？」

「ほう、気づいたようだな。悪いが、回数は忘れてしまった。なに、
気にすることはない。また忘れてしまうのだから。そして、霊子に
刻み込まれた記憶が、君を苦しめてくれるだろう」

セイバーは自分の身に降りかかった過去の出来事を思い返してい
た。それは間欠泉のように勢いよく噴きだし、彼女の記憶として肉
体を食べる。そしてその度に絶望の淵に追いやられ、すんでのところ
で巻き戻されていく。

「余は……また、くり返すというのか……この無限の円環を……」

「そうだ。そして巻き戻る為に必要な力は、君の絶望が担ってくれ
る。君の恐怖が、怒りが、失意が……元に戻りたいと願ったその想

いが、過去に君を引き寄せる」

「な……い、いやだっ！ またこんな屈辱を受けるのはたくさん
だ！」

「いいや、それでも君は願ってしまう。これだけ身体を穢された自
分自身を、君は許せないのだから」

「あ、あ、あああああああ……っ！」

美意識とプライドの高さ故、この現実を受け止めることが出来な
いセイバー。そして彼女は巻き戻る。キャスターに囚われた、あの
記憶の地点まで――。



■ 奥付 ■

発行 : the Eternal Fane

発行日 : 2014/08/17

印刷 : ねこのしっぽ様

<http://assault.sakura.ne.jp/eternal/>

無断転載・無断複製・18歳未満閲覧禁止



the Eternal Fane

